ペンフレンド

原美代子
島根県・六一・無職

文芸誌のペンフレンドを求むの記事で、青森県南津軽郡、りんご栽培農家、一九歳、木田俊一の活字が私の目に止まりました。

「りんごの花ってどんな色、どんな香り。りんご園、十和田湖の風景のこと知りたい」

――憶えていますか。私が文通の友として俊一さんを選び、最初に出した手紙の言葉です。私は一九年間、生まれ育った出雲（いずも）の地を出たことがありませんでしたから、東北は遥か彼方で、地図や教科書だけの知識しかありませんでした。

――「りんごの花を押し花にして送りました。僕の写真は、大鰐（おおわに）スキー場で撮ったものです。あなたのも……」――私は、新年に出雲大社の大鳥居の前で写したのを送りました。「出雲は神話の国です。簸川（ひかわ）平野の真ん中を流れる斐伊（ひい）川、防風林の築地松、四季を通して雲の美しいところです。果てしなく続く空の延長線にある津軽地方にイメージを膨らましています」と書きました。

山陰の底冷えのする寒い夜に勤めから帰ると、座敷の炬燵の上に郵便小包です。私宛てに届いた俊一さんからでした。雪国のこけしが二つ。並べて見ると恋人同士のようで、私はなぜか顔が赤らんだのを思い出します。添え書きもありました。「親父があなたの写真を見て、嫁さんに来てくれないかな、と言い、おふくろは出雲の縁結びの神様にお願いに行こうかね、と微笑んでいました」

二年間も続いた文通でした。会ったこともない俊一さんへの思いを抱いて、私は両親のきめた親戚へ嫁いだのです。結婚したことを知らないあなたからの手紙が何通か届き、そして、いつしか途絶えたと兄から聞きました。ペンフレンドを通り越した恋心があったのに、それを伝えることが出来なかった私を許してください。インターネットであなたを探しています。メル友はいますが、デジタル文字には心がないから燃えるものがありません。私はもう一度、あの時の気持ちを手にしてみたいのです。俊一さん！

＊文通の友との手紙のやりとりは心を癒してくれました。手書きのお便りを恋しく思いだすこの頃です。